中央大学アカデミック・サポートセンター ライティング・ラボ
中野玲子、松井雄志、林雅子

2024年３月４日

中央大学アカデミック・サポートセンター　ライティング・ラボ
2023年度後期活動報告書

抄録

今学期中のセッション数は、772件（前年同期698件）、稼働率は73.1％（前年同期74.11％）であった（Ⅰ-3）。このほか、今年度初の試みである休業期間の開室においては、夏季休業中の開室58件、冬季休業中の開室20件のセッションを行った。セッション形式の内訳は、学期中に実施した総セッション数のうち、対面は 359 件、オンラインは413 件であった。後期のオンラインセッション増加の要因は、大学院留学生及び法学部生の利用増加と考えられる。繁忙期に関しては、12月、１月は満席が続き、希望時間帯のセッションを予約するためには、早めの申込みが必要であった。

広報に関しては、従来通りの出張ガイダンスと見学ツアー実施に加え、茗荷谷キャンパス内法学部図書館にて、学部生向けワークショップを開催した。参加者獲得という課題が残ったものの、多摩キャンパス以外での広報活動に関して、来年度以降も検討していく。

チューター研修に関しては、今年度初の試みとして、夏季休業期間にライティング・ラボにて集合研修を実施した。春季休業期間にも実施予定としている。日頃の勤務では、顔を合わさないチューターが集合し研修を行うことで、チューター間のコミュニケーションを促進し、学び合う関係性の構築を目指した。学期中は集合研修を実施することは難しいため、今後も夏季・春季休業中に各１回の集合研修を実施し、セッションの質の向上に努めたい。

以　　上

はじめに

202３年度後期におけるライティング・ラボの活動状況について、以下の通り報告する。Ⅰでは開室状況と利用実績、Ⅱではセッション以外の活動、Ⅲでは来期にむけて特筆すべき所見を述べる。

Ⅰ 開室状況と利用実績

Ⅰ-1 開室期間と日数、チューター配置数

開室期間：2023 年 9 月 21 日から 2024 年 1 月 23 日までの月～金曜日
開室時間：14:10～17:40 ※月・木曜日のみ 10:50～17:40
開室日数：75 日（前年度 75 日）
設置セッション数：1067 コマ（前年度 954 コマ）[1]

アカデミック・ライティング部門長：尹智鉉
スーパーバイザー（SV）：中野玲子
アソシエイト・スーパーバイザー（ASV）：林雅子
アシスタント・スーパーバイザー（ASV）：松井雄志
シニアチューター（ST）：5名
チューター7名

Ⅰ-2 受付方針（2023 年度後期）

受付優先順位および予約の可否は、文章の種類（対象文章かそれ以外か）に基づく。

1. 対象文章
   授業で課題となったレポート、発表レジュメ、卒業論文、修士論文、博士論文、投稿論文、プレゼンテーション原稿（スライド、口頭用）、研究計画書、ボランティアセンター報告書、総合政策学部プロジェクト活動報告書

2. 空きがある場合につき、受け付ける文章
   奨学金応募書類に含まれる志望動機書、留学志望書、公務員試験練習課題
   日本語翻訳（授業の課題のみ）
   そのほか、アカデミック・ライティングの観点でコメントできそうな文章

3. 受付不可とする文章
   就職活動関係の文章（キャリアセンターへ案内）、メールや手紙の文章
   英語の文章、公務員試験以外の筆記試験対策のための相談

[1] 稼働可能なブース数すなわちチューターの配置数をコマとしてカウントした。SV/ASV に関しては、セッション空き時間はその他業務を行うため、設置数に含めない。

Ⅰ-3 実施セッション数と稼働率

実施セッション数：772 件（前年度 698 件）（うち対面 359 件、オンライン 413 件）
セッション稼働率：73.10%（前年度稼働率 74.11%）[2]

図1に、2013年のライティング・ラボ開設時からのセッション稼働率推移を、表1に利用数他の推移を示す。

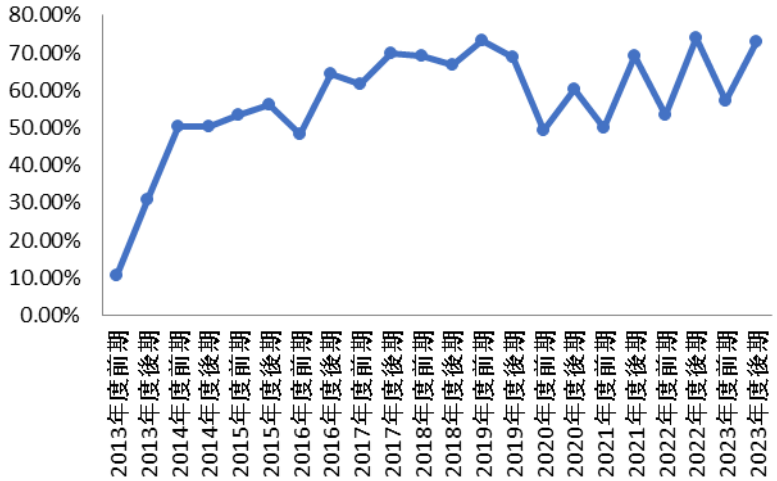

図1　ライティング・ラボ学期別稼働率の推移

表1　ライティング・ラボ　利用状況の推移

年度・期	利用数	開室日数	設置セッション	セッション稼働率	利用数前年同期比
2013 年度前期	89	45	420	10.71%	—
2013 年度後期	124	45	402	30.84%	—
2014 年度前期	210	45	417	50.36%	+39.33%
2014 年度後期	220	45	437	50.34%	+77.42%
2015 年度前期	232	62	434	53.45%	+10.48%
2015 年度後期	338	60	603	56.05%	+53.64%
2016 年度前期	246	59	511	48.14%	+6.03%
2016 年度後期	390	60	606	64.36%	+15.38%
2017 年度前期	433	60	703	61.59%	+37.57%
2017 年度後期	555	61	795	69.81%	+31.19%
2018 年度前期	539	60	781	69.01%	+24.48%
2018 年度後期	547	62	820	66.71%	-1.44%
2019 年度前期	564	56	768	73.43%	+4.65%

[2] SV/ASV に関しては、セッション空き時間はその他業務を行うため、設置数に含めない。また、No Show（予約はしたものの来室せず）については、実施扱いで稼働率を算出した。実際のセッションは 772 回であるが、稼働率の計算に関しては、セッション数は 780 回としている。

2019 年度後期	565	56	821	68.82%	+3.29%
2020 年度前期	129	36	261	49.4%	-22.9%[3]
2020 年度後期	355	56	588	60.4%	-37.1%
2021 年度前期	425	70	852	49.88%	＋329.5%
2021 年度後期	635	72	916	69.32%	＋78.9%
2022 年度前期	408	73	771	53.44%	-4%
2022 年度後期	698	75	954	74.11%	+9.9%
2023 年度前期	441	75	783	57.09%	+8.1%
2023 年度後期	772	75	1067	73.1%	+10.6%

20 年度から前期と後期で稼働率に差が生じている。後期は主に学部4年生の卒業論文と大学院留学生の修士論文執筆のためのセッション利用により、稼働率が上昇する。一方、前期は学部生のレポート執筆のためのセッション利用が中心となる。学部生の利用内訳を見ると、学部1年の利用は 93 名、学部2年の利用は 75 名、学部3年の利用は 47 名、学部4年の利用は 306 名である。学部1年生から学部3年生の利用を促進し、ラボを継続利用する学生を増やしていきたい。

23 年度後期のセッションの稼働実態として、以下に、週毎の設置数・稼働数の推移（図2）、週毎の稼働率の推移（図3）週別・曜日別のセッション数と稼働率の表（表 2、表 3）を示す。これらの図表からも、白門祭以降は利用率が挙がり、ほぼ連日満席だったことが明らかである。

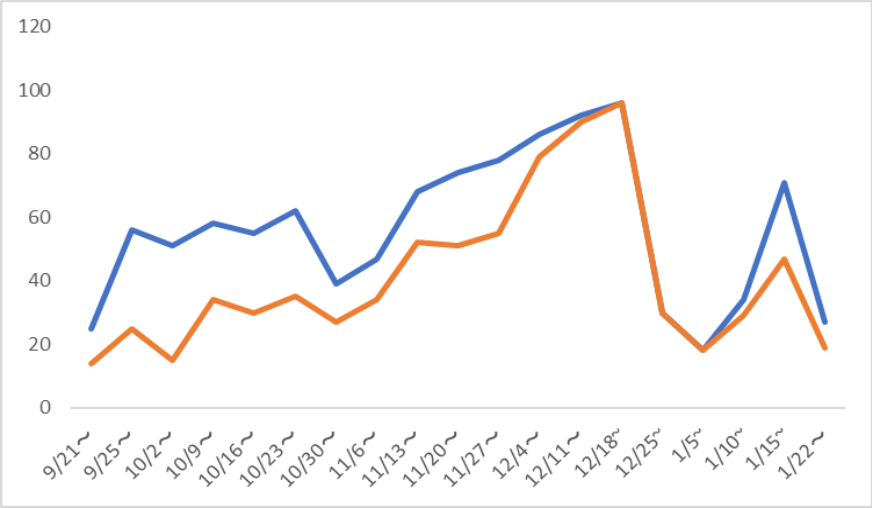

図2 2023 年度後期週別セッション設置数・稼働数の推移
（青色：設置数、茶：稼働数）

[3] 20 年度はコロナ禍により、オンラインセッションのみ実施した。

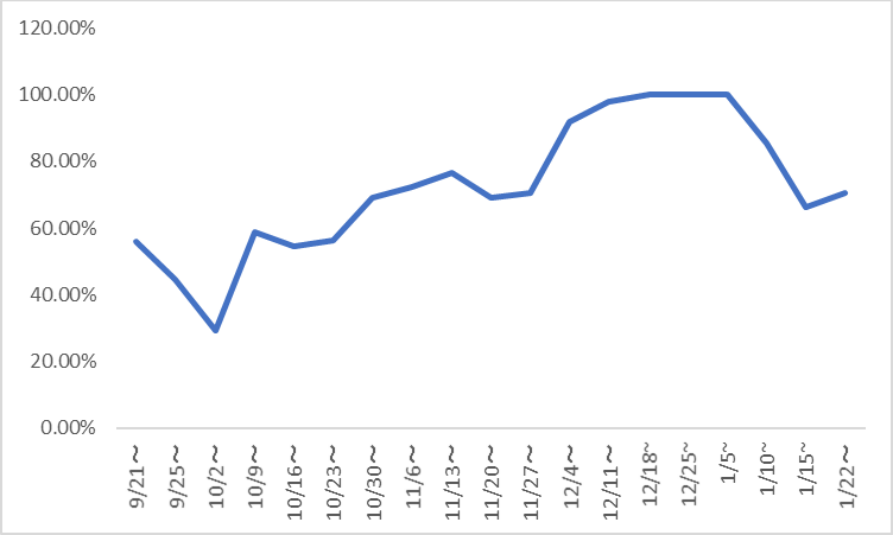

図3　2023 年度後期週別セッション稼働率の推移

また、表 2･3 で曜日別に見ると、火曜及び金曜の稼働率が高いことが分かる。これはセッション設置数が他曜日と比較して、少ないためである。また月曜日と木曜日は新人チューターの着任曜日となり、新人チューター研修を実施していたため、稼働率が比較的低くなった。

表 2　週別・曜日別セッション数・稼働率（9 月第 4 週～11 月第 3 週）

		9/21～	9/25～	10/2～	10/9～	10/16～	10/23～	10/30～	11/6～	11/13～
月	設置数		17	16	16	13	16	17		21
	稼働数		5	2	7	6	7	13		14
	稼働率		29.41%	12.50%	43.75%	46.15%	43.75%	76.47%		66.67%
火	設置数		5	4	7	7	11	10	11	9
	稼働数		4	0	5	4	9	7	11	9
	稼働率		80.00%	0.00%	71.43%	57.14%	81.82%	70.00%	100.00%	100.00%
水	設置数		11	10	10	12	11	12	11	12
	稼働数		3	2	5	6	3	7	6	9
	稼働率		27.27%	20.00%	50.00%	50.00%	27.27%	58.33%	54.55%	75.00%
木	設置数	14	14	14	16	14	14		15	16
	稼働数	7	6	6	8	9	6		11	11
	稼働率	50.00%	42.86%	42.86%	50.00%	64.29%	42.86%		73.33%	68.75%
金	設置数	11	9	7	9	9	10		10	10
	稼働数	7	7	5	9	5	10		6	9
	稼働率	63.64%	77.78%	71.43%	100.00%	55.56%	100.00%		60.00%	90.00%
計	設置数	25	56	51	58	55	62	39	47	68
	稼働数	14	25	15	34	30	35	27	34	52
	稼働率	56.00%	44.64%	29.41%	58.62%	54.55%	56.45%	69.23%	72.34%	76.47%

表 3 週別・曜日別セッション数・稼働率（11 月第 4 週～1 月第 4 週）

		11/20～	11/27～	12/4～	12/11～	12/18~	12/25~	1/5~	1/10~	1/15~	1/22～	前期全体
月	設置数	19	21	21	29	30	30			23	20	309
	稼働数	10	13	15	29	30	30			16	14	211
	稼働率	52.63%	61.90%	71.43%	100.00%	100.00%	100.00%			69.57%	70.00%	68.28%
火	設置数	15	12	12	12	12				6	7	140
	稼働数	9	11	12	12	12				4	5	114
	稼働率	60.00%	91.67%	100.00%	100.00%	100.00%				66.67%	71.43%	81.43%
水	設置数	12	13	15	14	14			15	14		186
	稼働数	6	4	14	13	14			15	9		116
	稼働率	50.00%	30.77%	93.33%	92.86%	100.00%			100.00%	64.29%		62.37%
木	設置数	17	18	22	21	22			19	16		252
	稼働数	16	13	22	20	22			14	10		181
	稼働率	94.12%	72.22%	100.00%	95.24%	100.00%			73.68%	62.50%		71.83%
金	設置数	11	14	16	16	18		18		12		180
	稼働数	10	14	16	16	18		18		8		158
	稼働率	90.91%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%		100.00%		66.67%		87.78%
計	設置数	74	78	86	92	96	30	18	34	71	27	1067
	稼働数	51	55	79	90	96	30	18	29	47	19	780
	稼働率	68.92%	70.51%	91.86%	97.83%	100.00%	100.00%	100.00%	85.29%	66.20%	70.37%	73.10%

注）100%超は、提出期限直前等の学生対応のため、延長等で設置数より多くセッションを行ったことを表している。

セッション形式の内訳について、図4にて示す。

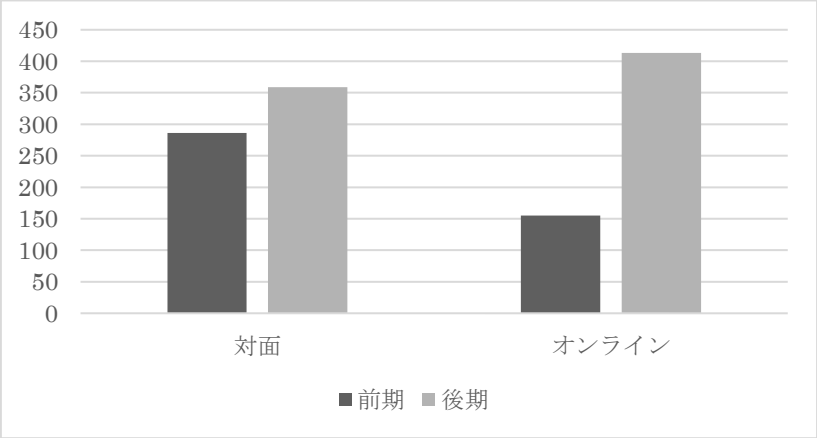

図4 2023 年度前期後期 セッション形式比較

2023年度前期と比較すると、オンラインセッションの利用率が大きく伸びている（2023年度前期 155 件、2023年度後期413件）。これは、法学部生の利用が後期大きく増加したことと、大学院留学生がオンラインセッションを利用していたことが要因と考えられる。

【所見】

稼働率に関しては、11 月以降に高くなり、期末前には連日 100%近い稼働率となった。チューターの負担およびセッションの質の維持・向上を考えると60%台での推移が望ましく、チューターの育成が課題といえる。来期以降もチューター募集及び研修を継続的に行い、セッションの量・質共に維持・向上に努めたい。

今期の特徴としては、オンラインセッションのニーズが増加したことが挙げられる。法学部生の利用に加えて、修士論文を執筆している大学院留学生へのセッションが多かったことが利用として考えられる。茗荷谷キャンパスへは年間を通した広報の実施、大学院留学生には早い段階での利用促進を行いたい。

Ⅰ-4 利用学生の内訳

＊利用学生数（延べ）[4]

2023 年度後期合計 772 名（前年度 698 名）

＊初来室数

206 名。そのうち留学生の初来室は 18 名

＊利用学生の所属 （ ）内は留学生の人数

法学部	121（4 名）
経済学部	51 名（8 名）
商学部	61 名（1 名）
理工学部	1 名（0 名）
文学部	253 名（2 名）
総合政策学部	46 名（0 名）
国際経営学部	24 名（0 名）
国際情報学部	0 名（0 名）
法学研究科博士前期	48 名（43 名）
経済学研究科博士前期	48 名（46 名）
商学研究科博士前期	28 名（26 名）
理工学研究科博士前期	0 名（0 名）
文学研究科博士前期	51 名（48 名）
総合政策／公共政策研究科博士前期	22 名（13 名）
法学研究科博士後期	2 名（2 名）
経済学研究科博士後期	0 名（0 名）
商学研究科博士後期	0 名（0 名）
文学研究科博士後期	8 名（8 名）
総合政策／公共政策研究科博士後期	0 名（0 名）
法学部通信教育課程	6 名（0 名）
ビジネススクール	0 名（0 名）
聴講生	0 名（0 名）
科目等履修生	2 名（0 名）
計	772 名（201 名）

＊利用学生の学年 （ ）内は留学生の人数

学部1年	93 名（4 名）
学部2年	75 名（0 名）
学部3年	47 名（2 名）
学部4年	306 名（7 名）
学部5年以上	36 名（2 名）

[4] 延べ利用数。実施セッション数に基づくため、同一学生の同一日利用および連続セッションを含む。

博士前期／修士	197 名（176 名）
博士後期	10 名（10 名）
法学部通信教育課程	6 名（0 名）
ビジネススクール	0 名（0 名）
聴講生	0 名（0 名）
科目等履修生	2 名（0 名）
計	772 名（201 名）

Ⅰ-5 相談文章の種類 （ ）内は留学生の人数

授業のレポート	231 件（39 件）
授業の発表資料	20 件（8 件）
研究計画書	24 件（4 件）
卒業論文	295 件（8 件）
修士論文	143 件（127 件）
博士論文	2 件（2 件）
投稿論文・研究ノート	22 件（8 件）
学外での発表資料	5 件（4 件）
その他	30 件（1 件）

【所見】

前期の稼働率は 57.09%であったものの、後期の稼働率が 70%を超えているのは、卒業論文や修士論文での利用が増えるためである。駆け込み需要も一定数見られ、「書き手を育てる」というラボの理念を活かせないセッションも見受けられる。「書き手を育てる」という観点からも、学部1年から学部3年までの学修の早い段階でのラボ利用促進を推奨していきたい。

前期は法学部移転に伴い法学部生の利用数の減少が見られたが、後期は法学部生の利用が増加した。利用のきっかけは教員の推奨によるものが多く、授業のレポート執筆にあたり、教員からの利用推奨が増加したと考えられる。

Ⅰ-6 夏季開室と冬季開室

今年度初の試みとして、学生のニーズ調査も兼ね、夏季休業期間と冬季休業期間に開室を行った。夏季休業中は卒業論文及び研究計画書の執筆のニーズが高く、冬季休業中は修士論文のニーズが高かった。セッションはSV及びASVが行った。セッション設置数が少ないため、ここでは稼働率ではなく、稼働数や利用者の内訳を報告する。

【夏季開室】

・開室日程 8/1、3、22、24、29、31、9/5、7、12、14（計10日間）

・利用学生数 58名（留学生 7 名）

・初来室数 26 名（留学生 0 名）

・セッション形式　( ) 内は留学生の人数
対面　　14 名（2 名）
オンライン　44 名（5 名）

・利用学生の所属　( ) 内は留学生の人数

法学部	13（0 名）
経済学部	2 名（0 名）
商学部	12 名（0 名）
文学部	18 名（0 名）
国際経営学部	6 名（2 名）
文学研究科博士前期	1 名（0 名）
総合政策／公共政策研究科博士前期	2 名（2 名）
文学研究科博士後期	3 名（3 名）
法学部通信教育課程	1 名（0 名）
計	58 名（7 名）

＊利用学生の学年　( ) 内は留学生の人数

学部1年	4 名（0 名）
学部2年	3 名（0 名）
学部3年	14 名（0 名）
学部4年	29 名（2 名）
学部5年以上	1 名（0 名）
博士前期／修士	3 名（2 名）
博士後期	3 名（3 名）
法学部通信教育課程	1 名（0 名）
計	58 名（7 名）

・相談文章の種類　( ) 内は留学生の人数

授業のレポート	7 件（0 件）
研究計画書	20 件（1 件）
卒業論文	21 件（0 件）
修士論文	3 件（2 件）
投稿論文・研究ノート	3 件（3 件）
その他	4 件（1 件）

・ライティング・ラボを知ったきっかけ　( ) 内は留学生の人数

授業で知った／先生にすすめられた	19 件（0 件）
友人／先輩／後輩にすすめられた	4 件（0 件）
学内のポスターやパンフレットで知った	7 件（0 件）

その他　2 件（0 件）

【冬季開室】
・開室日程 12/26、27（計 2 日間）

・利用学生数 20 名（留学生 15 名）

・初来室数 2 名（留学生 0 名）

・セッション形式
すべてオンラインのみの実施

・利用学生の所属 （ ）内は留学生の人数

商学部	1 名（0 名）
法学研究科博士前期	6 名（4 名）
文学研究科博士前期	10 名（9 名）
総合政策／公共政策研究科博士前期	3 名（2 名）
計	20 名（15 名）

＊利用学生の学年 （ ）内は留学生の人数

学部3年	1 名（0 名）
博士前期／修士	19 名（15 名）
計	20 名（15 名）

・相談文章の種類 （ ）内は留学生の人数

授業のレポート	2 件（2 件）
卒業論文	1 件（0 件）
修士論文	17 件（13 件）

・ライティング・ラボを知ったきっかけ （ ）内は留学生の人数

友人／先輩／後輩にすすめられた	1 件（0 件）

【所見】
両期間とも一定数の利用があり、ニーズもあることが明らかになったため、2024 年度以降も継続して、長期休業中の開室を行っていく。

Ⅰ-7 利用学生のアンケート

各セッション終了後、利用学生に任意でアンケートに協力してもらった。対面では紙面にて、オンラインは Google フォームにて実施した。後期は対面では269通、オンラインでは71通を回収した。質問項目と結果を以下に示していく。

ライティング・ラボを知ったきっかけ[5]

回答の重複を避けるため、ライティング・ラボを知ったきっかけについては、予約フォームにて初回利用の学生に限定してたずねた。回答件数と割合を表 4 にまとめた。

表 4 ライティング・ラボを知ったきっかけ（複数回答可）

きっかけ	全体の件数（%）	うち留学生の件数（%）
ラボの HP／SNS	20（8.9）	4（14.8）
授業で知った／先生にすすめられた	116（51.8）	14（51.9）
友人／先輩／後輩にすすめられた	32（14.3）	5（18.5）
レポートの書き方資料で知った	10（4.5）	2（7.4）
学内のポスターやパンフレットで知った	36（16.1）	1（3.7）
ラボのイベント（講座など）で知った	2（0.9）	0（0.0）
入学時のガイダンス／資料で知った	4（1.8）	1（3.7）
その他	4（1.8）	0（0.0）
合計	224（100.0）	27（100.0）

【所見】

きっかけは教員の推奨によるものが多かった。今後も教員への宣伝を継続し、学生への周知につなげたい。次いで友人などの知り合いにすすめられた、学内のポスターやパンフレットで知ったという回答が多かった。知り合いにすすめられたことで、ラボという初めて行く場所へのハードルが下がったことが考えられる。学内に掲示するポスターは学生が目にしやすい位置になるよう意識しているため、その成果が出たと言えよう。一方、ラボのイベント等で知った割合は低く、今後より多くの学生が気軽にラボへ訪れることができるよう、積極的にイベントの開催やその周知をしていきたい。

セッションは有益だったか[6]

ここからはセッション後のアンケートの回答をまとめていく。比較として、表には前期の回答も併記した。まず、セッションが有益だったかどうかに対する回答人数と割合を、セッション形式別に表 5 にまとめた。

[5] この項目のみ、全体の傾向を掴むため前期の回答も併せて計算した。

[6] 「有益ではなかった」「あまり有益ではなかった」「どちらともいえない」「有益だった」「とても有益だった」の 5 段階評価。

表 5 セッションは有益だったか

回答項目	後期の回答人数（%）		前期の回答人数（%）	
	対面	オンライン	対面	オンライン
有益ではなかった	0 （0.0）	0 （0.0）	0 （0.0）	1 （4.0）
あまり有益ではなかった	0 （0.0）	0 （0.0）	0 （0.0）	1 （4.0）
どちらともいえない	2 （0.7）	0 （0.0）	2 （1.1）	1 （4.0）
有益だった	49 （18.2）	11 （15.5）	33 （17.6）	2 （8.0）
とても有益だった	218 （81.0）	60 （84.5）	153 （81.4）	20 （80.0）
合計	269 （100.0）	71 （100.0）	188 （100.0）	25 （100.0）

セッションが有益だと感じた理由

セッションが有益だと感じた理由を、自由記述（任意）でたずねた。後期は卒業論文や修士論文を扱うセッションが多かった。理由でも、そうしたに長い文章にどう取り掛かっていけば良いのか、どのようにまとめていくのか、チューターとのやり取りを通して整理できたことが主に述べられていた。

【所見】

後期のセッションについて、対面・オンラインセッションともに 9 割の学生が「有益だった」「とても有益だった」と回答していた。さらに、前期ではオンラインセッションにおいて「有益ではなかった」「あまり有益ではなかった」という回答が各 1 件ずつ見られたが、後期では対面・オンラインセッションともに 0 件であった。前期に比べ利用人数は増えているが、ほとんどの学生にとって満足のいくセッションが行えたと言えよう。

セッションが有益であった理由について、先述したように卒業論文に関するものが多く見られた。卒業論文は進路に関わるものであり、これまでの授業のレポートなどに比べると文量も多い。チューターが学生に寄り添い質問や指摘をしていくことで学生の思考が整理され、きちんと完成できるかという学生の不安を解消し今後の方向性を明確化することができた。今後も学生が主体的な書き手として成長できるよう、チューター研修を重ねていくことが求められる。

セッションの時間[7]

次に、セッションの時間についてどう感じたかについての回答人数と割合を表 6 に示した。

表 6 セッションの時間についてどう感じたか

回答項目	後期の回答人数（%）		前期の回答人数（%）	
	対面	オンライン	対面	オンライン
短かった	7 （2.6）	4 （5.6）	6 （3.2）	3 （12.0）
少し短かった	46 （17.1）	20 （28.2）	26 （13.8）	4 （16.0）

[7] 「短かった」「少し短かった」「妥当だった、ちょうどよかった」「少し長かった」「長かった」の 5 段階評価。

妥当だった、ちょうどよかった	216 (80.3)	45 (63.4)	155 (82.4)	16 (64.0)
少し長かった	0 (0.0)	2 (2.8)	1 (0.5)	1 (4.0)
長かった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.0)
合計	269 (100.0)	71 (100.0)	188 (100.0)	25 (100.0)

【所見】

対面・オンラインセッションともに多くの学生がセッション時間を妥当であると回答していた。一方で、「少し短かった」と回答している学生の割合は前期に比べて増えている。後期は卒業論文など長い文章を扱うセッションが多く、一回のセッションで文章の課題点をすべて解決するのは難しい。そのため、もう少し長くやりたいと感じる学生が増加したのであろう。ラボの継続的な利用を勧めるほか、今回のセッションでどれぐらい進められたのか明確化し、学生が充足感を得られるよう工夫することが必要であると考えられる。

対面セッションの良かった点と困った点

セッションの良かった点/困った点について、セッション形式別にたずね、表にまとめた。まず、表 7 に対面セッションの良かった点、表 8 に対面セッションで困った点の回答件数と割合を示した。

表 7 対面セッションの良かった点（複数回答可）

回答項目	後期の回答件数（%）	前期の回答件数（%）
場所がわかりやすかった	61 (11.2)	45 (11.7)
セッションブースなどの環境が整っていた	113 (20.7)	66 (17.2)
文章の共有が楽だった	135 (24.7)	104 (27.2)
チューターとの意思疎通がしやすかった	228 (41.7)	158 (41.3)
その他	8 (1.5)	8 (2.1)
回答なし	2 (0.4)	2 (0.5)
計	547 (100.0)	383 (100.0)

表 8 対面セッションで困った点（複数回答可）

回答項目	後期の回答件数（%）	前期の回答件数（%）
場所がわかりにくかった	15 (5.5)	12 (6.3)
セッションブースなどの環境整備に問題がある	3 (1.1)	6 (3.1)

文章共有の準備に手間取った	7 (2.6)	9 (4.7)
チューターとの意思疎通が難しかった	3 (1.1)	3 (1.6)
その他	5 (1.8)	9 (4.7)
回答なし	238 (87.8)	152 (79.6)
計	271 (100.0)	191 (100.0)

オンラインセッションの良かった点と困った点

次にオンラインセッションについて、表 9 にオンラインセッションの良かった点、表 10 にオンラインセッションで困った点の回答件数と割合を示した。

表 9 オンラインセッションの良かった点（複数回答可）

回答項目	後期の回答件数（%）	前期の回答件数（%）
移動の手間が省けた	61 (54.0)	20 (47.6)
文章やデータの事前共有が楽だった	30 (26.5)	14 (33.3)
対面とは異なり緊張せずに済んだ	17 (15.0)	7 (16.7)
特になし	4 (3.5)	1 (2.4)
その他	1 (0.9)	0 (0.0)
計	113 (100.0)	42 (100.0)

表 10 オンラインセッションで困った点（複数回答可）

回答項目	後期の回答件数（%）	前期の回答件数（%）
場所の確保が難しかった	4 (5.2)	1 (4.0)
文章やデータの事前共有が大変だった	4 (5.2)	0 (0.0)
どのように操作すればよいのか わからず不安だった	6 (7.8)	1 (4.0)
チューターの声が聞き取りづらいときがあった	6 (7.8)	0 (0.40)
特になし	55 (71.4)	22 (88.8)
その他	2 (2.6)	1 (4.0)

合計	77 （100.0）	25 （100.0）

【所見】

対面セッションについて、前期に比べて「場所がわかりにくかった」を選択していた割合がわずかに低くなっていた。後期は卒業論文など長い文章を扱うことが多く、継続して利用する学生が多いためであろう。後述するアドバイスにて、ポスターにマップがあるとわかりやすいとの意見があった。新学期はじめのポスターでは、文字で場所を記載するだけでなくマップで図示することで、新入生にも場所がわかりやすくなることが考えられる。また、HPにラボへの経路が掲載されていることの周知も継続していきたい。

オンラインセッションについては、前期に比べて文章の共有やパソコンの操作について不安だったという回答やチューターの声が聞き取りにくかったという回答が増えていた。次年度からはZoomからWebexに切り替わるため、学生が快適に利用できるよう事前にチューター間で機器の操作等調整しておく必要があるだろう。

アンケートからは、ラボに対する要望として、チューターの指名が多く挙げられていた。卒業論文などの長い文章を作成する場合、継続的にラボを利用することが多い。しかし卒業論文や修士論文の締め切り間際は利用する学生が多く、同じチューターに継続してセッションを行うことは現実的に難しいだろう。チューターが余裕をもって次に担当するチューターに引き継ぎをし、学生の不安を取り除けるよう、十分な時間や人材を確保することが今後求められる。

また、セッション時間を延長する要望も見られた。コメントにあるように個人差はあるものの、40 分のセッション時間でどのようなことができるのかいくつか例示することがひとつの解決策になると推測される。HPの開室カレンダーには直近 10 日分の開室状況を掲示しているが、それに加え前期/後期の開室期間やセッションの例を掲示することで、学生がレポートや論文にいつから取り掛かればいいのか具体的にイメージすることができ、早期のラボ利用につなげられるのではないだろうか。これに関連して、チューターに専門的な部分を検討してほしいという要望があったが、ラボが支援をするのは学術的な文章の作成である。文献の収集は図書館で、専門的な観点は教授やゼミに、文章の作成はラボへ、といったように学生が支援先をうまく使い分けられるよう、ラボそのものの周知だけでなく、ラボではいったいどのようなことが検討できるのかまで学生に知ってもらう必要があると言えよう。

その他、自習スペースに関するコメントもあった。自習スペースを利用する学生の一部には、地べたに寝転がったり、大声でおしゃべりをしたりするなど、本来の用途から離れた使い方をしている者もいる。多くの学生が学業に集中できるよう、環境を整備していくべきであろう。

最後に、セッションで困った点で、対面・オンラインセッションともに多くの学生が回答なし、または特になしを選択していた。アドバイスでも感謝の表明や現状への満足を述べる回答が多数を占めており、多くの学生がセッションで満足感を得られていることがわかる。上述の要望を改善していき、より多くの学生に対してラボの理念に沿った学びの場を提供できるようにしていきたい。

Ⅱ　セッション以外の活動

Ⅱ-1　広報活動

Ⅱ-1-1 出張ガイダンス及び見学ツアーの実施

今学期は、出張ガイダンス２件、見学ツアー５件、合計 7 件実施した。今学期は、繁忙期に見学ツアーを可能な範囲で受け入れた。他の学生が実際にセッションを受けている様子が刺激になったという感想が寄せられた。

【所見】

後期は、前期と比較するとガイダンス・ツアーともに利用が少ない。しかし、11 月以降のセッション稼働率の高さを考えると、後期はガイダンス・ツアーについては実績の維持程度でよいと思われる。

ただし、ラボ利用のきっかけは「教員からの推奨」が最も高いため、教員に対するライティング・ラボの周知は前期後期とも行いたい。

Ⅱ-1-2　茗荷谷キャンパスワンポイント講座

茗荷谷キャンパスでの広報活動の一環として、今期初の試みで法学部図書館にて「レポートの書き方ワンポイント講座」を実施した。広報の難しさ、学生の昼食時間との重複などにより、参加者数が伸びず、課題が残る結果となった。広報に関する対策として①中央大学法学部 Web サイト Temico への情報掲載、②電子掲示板の継続掲載を検討した。Temico に関しては、お知らせ欄にライティング・ラボの通常開室の情報やイベント情報を白門祭以降掲載している。電子掲示板については、学期中途切れず掲載できるよう大学院事務より手続きを行った。

来年度以降、茗荷谷キャンパスにてワンポイント講座を開催する場合は、開催時間と場所を検討したい。学生が昼食を食べながら参加できる場所で開催する、授業内でワンポイント講座を実施するなど、法学部図書館と連携をとりながら来年度の開催に向けて検討をしたい。

主催：法学部図書館
日時及びテーマ：　10 月２５日（水）12:40-13:10「パラグラフ・ライティング」
　　11 月　７日（火）12:40-13:10「問いの立て方」
使用テキスト：中大ライティング・ラボ編『レポートの書き方資料』
担当チューター：法学研究科チューター３名

Ⅱ-2　研修

Ⅱ-2-1　学期中チューター全体研修

昼休み時間を利用し、合計４回の全体研修をオンラインにて実施した。曜日毎に各１回の研修を担当し、シニア・チューターを中心に、テーマ決め（表 11）、事前課題や当日進行の検討、資料作成等を行った。テーマは、日頃のセッションで見られる課題から抽出し、今学期は特にラボの基本的理念をどのようにセッションで応用するかという観点で研修を実施した。ライティング・ラボの基本的理念に沿って、セッション目的の設定、学生への声かけなど具体的なサポートを考える時間となった。

学期中４回の研修は、セッションスキル向上という側面からは決して十分とは言えない。しかし、繁忙期の全体研修実施も難しいため、今後も事前課題や事後課題を出すなどの工夫をして研修を実施し、セッションスキル向上につなげたい。

表 11　2023 年度後期チューター全体研修の概要

月日	担当	テーマ
10/5	水曜日チューター	専門度の高い部分に対するアカデミック・ライティングの観点からの関わり方
10/19	月曜日チューター	学生の内言を整理するときの支援の仕方
11/23	木曜日チューター	長い文章に対するセッション内容を引き継ぐ際の注意点
1/18	金曜日チューター	テーマの絞り方

Ⅱ-2-２　長期休業時チューター集合研修

上記以外では、今年度初の試みとして夏季休業中の９月 19 日（火）に、多摩キャンパス内で対面によるチューター集合研修を実施した。集合研修の目的は、対面で会う機会が不足しているチューター間のコミュニケーション促進と学び合いにつながる関係性づくりである。集合研修を通して関係性を構築し、日頃のセッションに関してチューター同士で相談し合えるようになることで、セッションスキル向上につなげたい。

日時：９月１９日（火）　午前　新人チューター初回研修（対象者２名）
　　午後　全チューター集合研修
概要：午前　ラボの歴史・理念、勤怠関係、セッション概要など
　　午後　文章診断練習及び模擬セッション

午後の集合研修では、２種類の文章の文章診断を行い、文章の問題点やセッションでの優先度などについてディスカッションを行った。ディスカッションの目標は、自身の文章診断における課題に気づくことである。その後、ペアに分かれて模擬セッションを行った。模擬セッションの目標は、セッションの進め方・質問の仕方など他チューターのセッションスキルを知ることで、自身のセッションのバリエーションを増やすことである。またチューター間でコメントをしあうことで、学び合いの経験にもつなげた。

シニア・チューターたちが、集合研修の目的を理解し、研修中に経験の浅いチューターとの学び合いに積極的に関わったこともあり、コミュニケーション促進・学び合う関係性づくりができた集合研修となった。

Ⅱ-2-３　新人チューター研修

今期就任の新人チューター２名に対し、配属曜日のチューターを中心に、文章診断練習・セッション見学・セッション計画・模擬セッション実施など約２か月にわたり実施した。２名とも１２月より１人でセッションを担当している。

今学期着任の新人チューターのうち１名は、法学研究科在籍で在宅勤務を行ったため、オンラインで新人研修を行った。オンライン新人研修における課題としては、学期開始後すぐにオンラインセッションが入らなかったため、セッション見学のタイミングが遅くなったこと、SV/ASV との研修が中心となりチューター同士の学び合いにつながらなかったことである。来学期以降法学研究科のチューターが着任する際は、オンラインでの新人研修もチューター同士の学び合いにつながるように、工夫をしていきたい。

【所見】

学期中４～５回のオンラインによる全体研修のみでは、セッションスキルの著しい向上は望めない。またチューター間のコミュニケーション促進や、学び合う関係性づくりも難しい。そこで、セッションスキルの向上に関しては、全体研修に関係する事前・事後課題に工夫をしていきたい。そして長期休業中の集合研修では、更なるセッションスキル向上に向けて、チューター間のコミュニケーション促進や関係性作りを図りたい。今回の対面による集合研修はシニア・チューターの協力もあり、意義深い研修となった。

Ⅱ-3 中大付属杉並高校チューター派遣業務

報告書を別添１に記載。

Ⅲ 来期に向けた所見

Ⅲ-１ チューター公募

後期のチューター公募を例年通り実施する。スケジュールは下記のとおりである。

2月29日（水）	応募書類受付締め切り
3月11日（月）	面接（尹先生、中野 SV、松井 ASV、林 ASV）
4月 1 日（月）	着任

Ⅲ-2 現場体制

来年度も今年度同様、スーパーバイザー１名、アシスタント・スーパーバイザー１名、アソシエイト・スーパーバイザー１名の合計3名を予定し、安定した運営が期待できる。

勤務2年半以上のチューターのうち優秀な者はシニア・チューターとして勤務している。2023 年度は5名であったが、そのうち１名が他大学のライティング・センターに着任するため１名欠員となる。この欠員については、2023年度末でシニア・チューター昇格要件を満たすチューターが１人いるため、2024 年度もシニア・チューターは５名体制となる。

アシスタント・スーパーバイザー/アソシエイト・スーパーバイザーまたチューターへのキャリア支援というライティング・ラボの役割を示すことで、安定したチューター獲得に繋げていきたい。

Ⅲ-3 年間開室スケジュール

２３年度は、年間を通して週２全日開室、週３半日（午後）開室を行った。来年度も、学期中に関しては同様の開室を行う。加えて、夏季休業中は週に２回、冬季休業中は２日間程度、春季休業中は週に１回の開室を来年度も継続したい。

以上

2023 年 3 月4日
スーパーバイザー 中野玲子
アシスタント・スーパーバイザー 松井雄志
アソシエイト・スーパーバイザー 林雅子

【別添１】

2023 年度中央大学アカデミック・サポートセンター ライティング・ラボ
中央大学杉並高校セッション(前期) 実施報告書

2024 年 1 月 11 日(月)

1. セッション設置数と実績

・前期に引き続き1セッション 40 分、開室時間①15:45-16:25、②16:30-17:10、③17:15-17:55
・後期は 42 回セッションを設置（前期と比べ 55.6%増）
・稼働率は後期 88%であった。前期実質 100%の稼働率であったことを考えると、今期のセッションの設置数は少なくとも後期における学生の需要を適切に充足していると評価できる。

<2023 年の稼働率>

月別	9・10 月	11 月	計
セッション設置数	33	9	42
セッション実績	30	7	37
稼働率	90.9%	77.8%	88.1%

2. ワークショップ

・後期のテーマは前年度に引き続き「パラグラフ・ライティング」とした。
・参加者は 17 名であった。
・昨年に引き続き、ライティング・ラボの紹介、パラグラフ・ライティングのワンポイント講座、Let's Try!の流れでワークショップを行った。昨年との変更点は、Try!の部分でワークの数を増やしたことである。
・昨年との変更点：前年度、「中心文を論理的に繋ぐ」ことが重要であると、理解のできるようなワークの追加要望が中杉国語科教員よりあった。これを受けて、今回は、中心文を繋ぐと要旨ができるといった内容のワークを追加した。本ワークの最後には、チューター自身が書いた論文の要旨を示したことで、生徒から「おお！」と感心の声が上がった。実際に先輩が書いた論文を目にすることで、一定の理解を促すことができたと感じている。
・検討する箇所：今回のワークショップでは、ワークを 3 つ行ったが、それぞれのワークの難易度が、チューター側と生徒側でやや異なる可能性が示唆された。今後、時間配分も考慮し、難易度を検討していきたい。
・終了後のアンケートは 17 名全員から回答を得られた。「本日の講座は有益だったと思いますか。」という問いに対して「強くそう思う」13 名、「ややそう思う」と答えた学生は 4 名と全体的に好評であった。
・また、「今後ライティング・ラボを利用したいと思いますか」という回答に関しても、「強くそう思う」13 名、「ややそう思う」4 名と高評価であった。フリーワードで「難しかった」と回答した学生も「強くそう思う」と回答している。今期の「パラグライティング・ラボ」ワークショップも、ライティング・ラボの周知に効果的なテーマであったことが伺える。

3.セッションについて

・本年度も昨年度と同様中杉の生徒が授業で使う Google Classroom から Google Meet に接続する形式のオンラインセッションと実際にチューターが学校を訪れる対面セッションを併用した。
・本年度後期は木曜日と金曜日に開講された。

・前期と同様、オンラインセッションは、中杉ミーティングルームで先生の PC を使って接続するか、自宅から通信を行う形で実施の予定であったが、通信に不安を感じる生徒が多かったため、結果としてほとんどの学生が学校から接続した。

・セッション前に学生に提出してもらう書類の中で、「来室のきっかけ」という項目について、従来自由記述であったが、今期から日報に合わせる形で「①先生の勧め ②友人の勧め ③自主的に希望して ④その他（理由を記述してください）」の 4 択から選ぶ形にした。

・課題配信は前期二回行っていたが、後期は水曜日に一回行うこととした。

4.所感

・今年度の生徒について

今年度の生徒は、前期と同様、非常にまじめな学生という印象であった。また、前期から継続的に利用をする学生も多く、少なくとも前期のセッションについて学生からの評価は悪くなかった事が伺える。

・双方向編集について

現行のセッション方法では主にオンラインセッションにおいて、チューターと学生との双方向の編集を実現すべきではないかという課題が主にチューター側から挙げられた。双方向編集を実現するためにはチューターの全学メールアドレスを中杉側の高校ネットワークの中に入れて頂く必要があった。今期はその提案が挙がった時点で既にセッションが始まっており、時間的余裕と技術的な問題から棚上げとなった。これについては来季以降、今後の課題として考えている。

・学生の感想について

現状、セッション終了後に学生が何を考えているかや、どのような感想を持っているかについて、把握する機会がほぼ無い。これに対して来学期すぐにということは難しいかもしれないが、来年度をめどに何らかの対応を考えたい。
具体的には Google フォームで作った 5 分程度で終わるアンケートに答えてもらう等が考えられるところである。

以　　上